

春の彼岸を迎えて！

自分の生き方を見つめよう。

今年の冬は、厳しかったですね。甲信越、東京方面には、大雪が降り、物流が滞り、食料、日用品が不足するなど、大変な年の始まりでしたが、ソチオリンピックで選手たちが、持てる力を発揮して、悔いのない成果を上げられたことは、多く国民の励みになったようです。

4月から、消費税が5%から8%に引き上げられて、私たちの暮らしがどうなるのか不安いだきますが、こればかりは、止めることができませぬ。今から千三百年前、大化の改新のときに、租庸調という税金を人々に課せられてきました。これは、人々の暮らしを守つてもらえるためのものであり、高くても払うしかありません。それが人として生きる道だと思いません。若し税金を納めなくてもいいというなら、人と人の争いごとで、国は乱れるでしょう。最近では、責任を取らない。義務を果たさない人が多く見受けられます。自己中心で、人の迷惑を顧みないという哀しい世の中になつていくことが誠に遺憾なことです。



慈しみの心で安らかな社会を築くことが、平和を享受できるものとも大切なことではないかと思ひます。

合掌の心

合掌とは、仏と一体となる。仏に帰依して、他人に深い尊敬の念を表す。右手は、仏様で、清らかなものや智慧を表す。左手は、衆生つまり自分自身であり、不浄を表す。日本では、お詫びするときやお願ひするとき相手を持ち上げるために使われます。南アジアなどでは日常の挨拶としていますが、その対象が本尊となれば【信心】となり、父・母ならば【孝養】となり、お互いに合掌し合えば【和合】(穏(おだ)やかな気持ち)となり、目上・上司・先輩に向かい合掌すれば【敬愛】(敬(うやま)いの心、親しみの心)を表すと云います。又、事物に向かつて合掌すれば【感謝】となる。形は一つですが意味は色々有り、我々生きていく上には常にその意味を噛み締めたいものです。たとえば、相手が強い調子で言つてくると、つい負けまいと更に強く出てしまふ。これでは終止の心で接すれば話も前進を見ることができよう。又、他人(ひと)から親切にされて「ありがとうございます」と素直に感謝の念を表す時の気持ち良さは、言つた方も言われた方も最高ですし、周りの第三者まで明るくなります。仏像の中には合掌の姿をされている方がおられます。慈悲そのものを形として表しており、私たちの心に秘めている仏性に対し合掌されているのです。仏さまの前に純真な心で向かうことこそ、合掌の姿なのです。親子・兄弟・夫婦・師弟・仲間・友達・初対面の人にも合掌をする心を持ち続ける心掛けは即ち【慈悲】であり【思いやり】です。

塔婆の話

塔婆は、地水火風空という五輪を刻み、形にして、人そのものです。地は体、水は血液、火は体温、風は呼吸、空は交じりあう。これで人を意味します。この塔婆は、亡き方の供養をするためにお墓に建てます。

お経の中に、「此中已有 如来全身」(此の中には、己に如来の全身居ます。)

信心と追善の願力によって、故人の霊を妙法に照らし、仏身として現し、私たちを救い、成就することが出来る。また、「造塔延命功德経」に、あと七日と寿命を告げられたときに塔婆を建てれば、延命できると記されています。我等、衆生、生死するは、塔婆を建て、開眼供養するは、死の成仏にして、草木成仏なり。自然の恵みを感じ、人間、動物、植物の命を受け継いでいくことがどんなに尊いことかを塔婆にこめて、建立するのであります。皆様方のご先祖様の年忌法要に建立して、ご先祖様を弔い、繁栄を願います。

法華千部会・恵心僧都一千年 御遠忌・真朗上人報恩謝徳法要

四月四日から4日間、総本山西教寺で「法華千部会法要」が厳修されます。過日、団体参詣の募集には、三十五名の集まっていた下さりありがとうございます。

壇信徒の皆様方には、毎年、法華千部会供養袋と霊名札を奉納していただいているのですが、今年は、恵心僧都一千年と真朗上人報恩謝徳法要と合行になります。特に、わが宗の教への根本になります恵心僧都の功績を讃える法要と天台真盛宗に独立したときの初代管長真朗上人の報恩謝徳法要が勤まります。

供養袋、例年通り、五百円

霊名札、今年のみ、一霊 五百円

(霊名札は来年、三百円に戻ります) 皆様方には、心苦しいのですが、ご理解くださいますよろしくお願ひします。

※尚、一霊で奉納していただいても結構です。

※パンフレット、冊子などを配布いたしますので、より一層深めていただきますよう重ねてお願ひします。

「女性の会の集い」盛況に終わる

去る二月十六日、二十五名の参加で、山本玄匠さんの講演の予定でしたが、インフルエンザのため、中止でしたが、急きよ、大河内智恵子先生にお願ひしまして、「頭、生き生き、健康の話」と題して、レクゲームを交えながらしていただきました。時折、笑いを誘い、汗をかきほどの楽しいひとときでした。



避けがたいことを避けがたいと知る

釈尊は、この世において、どんなに人でも成し遂げられないことが五つある。一つは、老いて行く身でありながら老くない。二つは、病む身でありながら病まない。三つは死すべき身でありながら死なない。四つは滅ぶべき身でありながら滅びない。五つは尽きるべき身でありながら尽きない。

老病死滅尽は、人間が避けることのできない永遠の真理であることを説いている。これは、誰一人として否定することのできない道理である。私たちはこの五つの苦しみの中で、右往左往している。

世の常の人々は、この避けがたいことにつき当り、いたずらに苦しみ悩むものですが、仏の教えを受けた人は、避けがたいことを避けがたいと知るといふ世界である。いわば目覚めの世界である。このような愚かな悩みの中で懸命に生きていくのが人間である。

「びんずる会」の活動

写経をして、心の修養をしますので、皆様のご参加をお待ちします。参加してみようと思われの方は、電話下さい。

発行者 高島市安曇川町田中三四五九

天台真盛宗玉泉寺 木村 哲基

電話 〇九〇—三七〇八—七二〇六

Eメール svka37375@eto.eonet.ne.jp

「天台真盛宗玉泉寺」のホームページも見てね